

一利己主義者と友人との対話

石川啄木

青空文庫

B おい、おれは今度また引越しをしたぜ。

A そうか。君は来るたんび引越しの披露ひろうをして行くね。

B それは僕には引越し位の外に何もわざわざ披露するような事件が無いからだ。
A 葉書でも済むよ。

B しかし今度のは葉書では済まん。

A どうしたんだ。何日いつかの話の下宿の娘から縁談でも申込まれて逃げ出したのか。

B 莫迦ばかなことを言え。女の事なんか近頃もうちつとも僕の目にうつらなくなった。女より食物くいものだね。好きな物を食ってさえいれあ僕には不平はない。

A 殊勝な事を言う。それでは今度の下宿はうまい物を食わせるのか。

B 三度三度うまい物ばかり食わせる下宿が何処どこにあるもんか。

A 安下宿ばかりころがり歩いた癖に。

B 皮肉らない。今度のは下宿じゃないんだよ。僕はもう下宿生活には飽き飽きしちゃった。

A よく自分に飽きないね。

B 自分にも飽きたさ。飽きたから今度の新生活を始めたんだ。室^{へや}だけ借りて置いて、飯は三度とも外へ出て食うことにしたんだよ。

A 君のやりそうなこったね。

B そうかね。僕はまた君のやりそうなこったと思っていた。

A 何故^{なぜ}。

B 何故ってそうじゃないか。第一こんな自由な生活はないね。居^{いどころ}処^{ところ}って奴は案外人間を束縛するもんだ。何処かへ出ていても、飯時になれあ直ぐ家のことを考える。あれだけでも僕みたいな者にや一種の重荷だよ。それよりは何処でも構わず腹の空^すいた時に飛び込んで、自分の好きな物を食った方が可^いじやないか。（間）何でも好きなものが食えるんだからなあ。初めの間^{うち}は腹のへって来るのが楽みで、一日に五回ずつ食ってやった。出掛けて行って食って来て、煙草でも喫^のんどるとまた直ぐ食いたくなるんだ。

A 飯の事をそう言えや眠る場所だってそうじゃないか。毎晩毎晩同じ夜具を着て寝るつてのも余り有難いことじゃないね。

B それはそうさ。しかしそれは仕方がない。身^{からだ}体一つならどうでも可いが、机もあるし本もある。あんな荷物をどつきり持って、毎日毎日引越して歩かなくちゃならないとな

つたら、それこそ苦痛じゃないか。

A 飯のたんびに外に出なくちやならないというのと同じだ。

B 飯を食いに行くには荷物はない。身体だけで済むよ。食いたいなあと思った時、ひよいと立って帽子を冠^{かぶ}って出掛けるだけだ。財布さえ忘れなけや可い。ひと足ひと足うまい物に近づいて行くつて気持は実に可いね。

A ひと足ひと足新しい眠りに近づいて行く気持はどうだね。ああ眠くなつたと思つた時、てくてく寢床を探しに出かけるんだ。昨夜は隣の室で女の泣くのを聞きながら眠つたつ^{ゆうべ}けが、今夜は何を聞いて眠るんだろうと思ひながら行くんだ。初めての宿屋じや此方^{こつち}の誰だかをちつとも知らない。知つた者の一人もない家の、行^{あんどん}燈か何かついた奥まつた室に、やわらかな夜具の中に緩^{ゆる}くり身体を延ばして安らかな眠りを待つてる気持はどうだね。

B それあ可いさ。君もなかなか話せる。

A 可いだろう。毎晩毎晩そうして新しい寢床で新しい夢を結ぶんだ。(間) 本も机も棄てつちまうさ。何もいらぬ。本を読んだつてどうもならんじやないか。

B ますます話せる。しかしそれあ話だけだ。初めのうちはそれで可いかも知れないが、

しまいにはきつとおつくうになる。やっぱり何処かに落付いてしまふよ。

A 飯を食いに出かけるのだってそうだよ。見給え、二日経つと君はまた何処かの下宿にころがり込むから。

B ふむ。おれは細君を持つまでは今の通りやるよ。きつとやってみせるよ。

A 細君を持つまでか。可哀想に。(間)しかし羨ましいね君の今のやり方は、実はずっと前からのおれの理想だよ。もう三年からになる。

B そうだろう。おれはどうも初め思いたった時、君のやりそうなこつたと思った。

A 今でもやりたいと思ってる。たつた一月でも可い。

B どうだ、おれん処へ来て一緒にやらないか。可いぜ。そして飽きたら以前に帰るさ。

A しかし厭だいやね。

B 何故。おれと一緒に厭なら一人でやつても可いじゃないか。

A 一緒でも一緒でなくても同じことだ。君は今それを始めたばかりで大いに満足してるね。僕もそうに違いない。やっぱり初めのうちは日に五度たびも食事をするかも知れない。

しかし君はそのうちに飽きてしまつておつくうになるよ。そうしておれん処へ来て、また引越しの披露をするよ。その時おれは、「とうとう飽きたね」と君に言うね。

B 何だい。もうその時の挨拶あいさつまで工夫くふうしてるのか。

A まあさ。「とうとう飽きたね」と君に言うね。それは君に言うのだから可い。おれは其奴そいつを自分には言いたくない。

B 相あい不かわ変らず厭な男なだなあ、君は。

A 厭な男さ。おれもそう思ってる。

B 君は何日か——あれは去年かな——おれと一緒に行って淫売屋いんばいやから逃げ出した時もそんなことを言った。

A そうだったかね。

B 君はきつと早く死ぬ。もう少し気を広く持たなくちゃ可かんよ。一体君は余りアンビシヤスだから可かん。何だって真の満足つてもものは世の中に有りやしない。従って何だつて飽きる時が来るに定きまつてらあ。飽きたり、不満足になったりする時を予想して何にもせずにいる位なら、生れて来なかった方が余つ程可いや。生れた者はきつと死ぬんだから。

A 笑わせるない。

B 笑つてもいないじゃないか。

A 可笑しくもない。

B 笑うさ。可笑しくなくったって些ちつたあ笑わなくちゃ可かん。はは。（間）しかし何だね。君は自分で飽きっぽい男だと言ってるが、案外そうでもないようだね。

A 何故。

B 相あいかわらず不変歌を作ってるじゃないか。

A 歌か。

B 止めたかと思うとまた作る。執念深いところが有るよ。やっぱり君は一生歌を作るだろうな。

A どうだか。

B 歌も可いね。こないだ友人とこへ行ったら、やっぱり歌を作るとか読むとかいう姉さんびんがいてね。君の事を話してやったら、「あの歌人はあなたのお友達なんですか」って喫驚びつくりしていたよ。おれはそんなに俗人に見えるのかな。

A 「歌人」は可かったね。

B 首をすくめることはないじゃないか。おれも実は最初変だと思ったよ。Aは歌人だ！何んだか変なものな。しかし歌を作ってる以上はやっぱり歌人にや違いないよ。おれ

もこれから一つ君を歌人扱いにしてやろうと思ってるんだ。

A 御馳走ごちそうでもしてくれるのか。

B 莫迦ばかなことを言え。一体歌人にしろ小説家にしろ、すべて文学者といわれる階級に属する人間は無責任なものだ。何を書いて書いたことに責任は負わない。待てよ、これは、何日か君から聞いた議論だったね。

A どうだか。

B どうだかつて、たしかに言ったよ。文芸上の作物は巧うまいにしろ拙まずいにしろ、それがそれだけで完了してると云う点に於て、人生の交渉は歴史上の事柄と同じく間接だ、とか何んとか。（間）それはまあどうでも可いが、とにかくおれは今後無責任を君の特権として認めて置く。特待生だよ。

A 許してくれ。おれは何よりもその特待生が嫌きらいなんだ。何日だっけ北海道へ行く時青森から船に乗ったら、船の事務長が知ってる奴だったものだから、三等の切符を持つておれを無理矢理に一等室に入れたんだ。室だけならまだ可いが、食事の時間になったらボーイを寄こしてとうとう食堂まで引張り出された。あんなに不愉快な飯を食ったことはない。

B それは三等の切符を持っていた所^せ為^いだ。一等の切符さえ有れあがり前じゃないか。

A 莫^ば迦^かを言え。人間は皆赤切符だ。

B 人間は皆赤切符！ やっぱり話せるな。おれが飯屋へ飛び込んで空^{あき}樽^{だる}に腰掛けるのもそれだ。

A 何だい、うまい物うまい物つて言うから何を食うのかと思ったら、一膳飯屋へ行くのか。

B 上^{かみ}は精養軒の洋食から下^{しも}は一膳飯、牛飯、大道の焼鳥に至るさ。飯屋にだつてうまい物は有るぜ。先^{さつき}刻来る時はとろろ飯を食つて来た。

A 朝には何を食う。

B 近所にミルクホールが有るから其^{そこ}処へ行く。君の歌も其^{そこ}処で読んだんだ。何でも雑誌をとつてる家だからね。（間）そうそう、君は何日か短歌が滅びるとおれに言つたことがあるね。この頃その短歌滅亡論という奴^{やつ}が流行^{はや}つて来たじゃないか。

A 流行るかね。おれの読んだのは尾^{おの}上^{えさ}柴^{いし}舟^{しゅう}という人の書いたのだけだ。

B そうさ。おれの読んだのもそれだ。然^{しか}し一人が言い出す時分にや十人か五人は同じ事を考えてるもんだよ。

A あれは尾上という人の歌そのものが行きづまって来たという事実^{じじつ}に立派な裏書^{うらがき}をしたものだ。

B 何を言う。そんなら君がああ議論を唱えた時は、君の歌が行きづまった時だったのか。

A そうさ。歌ばかりじゃない、何もかも行きづまった時だった。

B しかしあれには色色理窟^{りくつ}が書いてあった。

A 理窟は何にでも着くさ。ただ世の中のこととは一つだって理窟によって推移していないだけだ。たとえば、近頃の歌は何首^{あるい}或は何十首を、一首一首引き抜いて見ないで全体として見るような傾向になって来た。そんなら何故^{なぜ}それらを初めから一つとして現さないか。一一分解して現す必要が何処にあるか、とあれに書いてあったね。一応^{もつと}尤もに聞えるよ。しかしあの理窟に服従すると、人間は皆死ぬ間際^{まぎわ}まで待たなければ何も書けなくなるよ。歌は——文学は作家の個人性の表現だということを狭く解釈してるんだからね。飯に今夜なら今夜のおれの頭の調子を歌うにしてもだね。なるほどひと晩のことだから一つに纏^{まと}めて現した方が都合は可いかも知れないが、一時間は六十分で、一分は六十秒だよ。連続^{れんぞく}はしているが初めから全体になっているのではない。きれぎれに頭に浮んで来る感じを後^{あと}から後^{あと}からときれぎれに歌ったって何も差^さ支^さえがないじゃないか。一つ

に纏める必要が何処にあると言いたくなるね。

B 君はそうすつと歌は永久に滅びないと云うのか。

A おれは永久という言葉は嫌いだ。

B 永久でなくても可い。とにかくまだまだ歌は長^{なが}生^{いき}すると思うのか。

A 長生はする。昔から人生五十というが、それでも八十位まで生きる人は沢山ある。それと同じ程度の長生はする。しかし死ぬ。

B 何日になったら八十になるだろう。

A 日本の国語が統一される時さ。

B もう大分統一されかかっているぜ。小説はみんな時代語になった。小学校の教科書と詩も半分はなつて来た。新聞にだって三分の一は時代語で書いてある。先を越してローマ字を使う人さえある。

A それだけ混乱していたら沢山じゃないか。

B うむ。そうすつとまだまだか。

A まだまだ。日本は今三分の一まで来たところだよ。何もかも三分の一だ。所謂^{いわゆる}古い言葉と今の口語と比べてみても解る。正確に違つて来たのは、「なり」「なりけり」と

「だ」「である」だけだ。それもまだまだ文章の上では併用されている。音文字おんもじが採用されて、それで現すに不便な言葉がみんな淘汰とうたされる時が来なくちや歌は死なない。

B 気長い事を言うなあ。君は元来性急せっかちな男だったがなあ。

A あまり性急だったお蔭かげで気長になったのだ。

B 悟ったね。

A 絶望したのだ。

B しかしとにかく今の我々の言葉が五とか七とかいう調子を失ってるのは事実じゃないか。

A 「いかにさびしき夜なるぞや」「なんてさびしい晩だろう」どっちも七五調じゃないか。

B それは極めて稀まれな例だ。

A 昔の人は五七調や七五調でばかり物を言っていたと思うのか。莫迦。

B これでも賢いぜ。

A とはいうものの、五と七がだんだん乱れて来てるのは事実だね。五が六に延び、七が八に延びている。そんならそれで歌にも字あまりを使えば済むことだ。自分が今まで勝

手に古い言葉を使つて来ていて、今になって不便でもないじゃないか。なるべく現代の言葉に近い言葉を使つて、それで三十一字に纏まとりかねたら字あまりにするさ。それで出来なければ言葉や形が古いんでなくつて頭が古いんだ。

B それもそうだね。

A のみならず、五も七も更に二とか三とか四とかにまだまだ分解することが出来る。歌の調子はまだまだ複雑になり得る余地がある。昔は何日いつの間にか五七五、七七と二行に書くことになつていたのを、明治になつてから一本に書くことになった。今度はあれを壊こわすんだね。歌には一首一首各異おのおのつた調子がある筈はずだから、一首一首別なわけ方で何行かに書くことにするんだね。

B そうすると歌の前途はなかなか多望なことになるなあ。

A 人は歌の形は小さくて不便だというが、おれは小さいから却かえつて便利だと思つていて。そうじゃないか。人は誰でも、その時が過ぎてしまえば間もなく忘れるような、乃至ないしは長く忘れずにいるにしても、それを言い出すには余り接穂つぎほがなくてとうとう一生言い出さずにしまうというような、内から外からの数限りなき感じを、後から後からと常に経験している。多くの人はそれを軽蔑けいべつしている。軽蔑しないまでも殆ど無関心ほとんにエスケ

ーブしている。しかしいのちを愛する者はそれを輕蔑することが出来ない。

B 待てよ。ああそうか。一分は六十秒なりの論法だね。

A そうさ。一生に二度とは歸つて来ないのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。

ただ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇てまひまのいらぬ歌が一番便利なのだ。實際便利だからね。歌という詩形を持つてゐることは、我々日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。（間）おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身は何よりも可愛いから歌を作る。（間）しかしその歌も滅亡する。理窟からでなく内部から滅亡する。しかしそれはまだまだ早く滅亡すれば可いと思うがまだまだだ。

（間）日本はまだ三分の一だ。

B いのちを愛するつてのは可いね。君は君のいのちを愛して歌を作り、おれはおれのいのちを愛してうまい物を食つてあるく。似たね。

A （間）おれはしかし、本当のところはおれに歌なんか作らせたくない。

B どういう意味だ。君はやっぱり歌人だよ。歌人だつて可いじゃないか。しつかりやるさ。

A おれはおれに歌を作らせるよりも、もつと深くおれを愛している。

B 解らんな。

A 解らんかな。（間）しかしこれは言葉でいうと極くつまらんことになる。

B 歌のような小さいものに全生命を託することが出来ないというのか。

A おれは初めから歌に全生命を託そうと思ったことなんかない。（間）何にだつて全生命を託することが出来るもんか。（間）おれはおれを愛してはいるが、そのおれ自身だつてあまり信用してはいない。

B （やや突然に）おい、飯食いに行かんか。（間、独語するように）おれも腹のへつた時はそんな気持のすることがあるなあ。

青空文庫情報

底本：「石川啄木集（下）」新潮文庫、新潮社

1950（昭和25）年7月15日発行

1970（昭和45）年6月15日25刷改版

1991（平成3）年3月5日48刷

底本の親本：「啄木全集第4巻 評論 感想」筑摩書房

1967（昭和42）年9月30日

初出：「創作 第一巻第九号」

1910（明治43）年11月1日

入力：青空文庫

校正：鈴木厚司

2004年8月11日作成

2016年4月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一利己主義者と友人との対話

石川啄木

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>